【近畿コンソーシアム・学生によるESD活動支援】
都跡中学校　校外学習支援　活動報告書

書道教育専修　２回生　間宮千尋

１. 日時：2024年５月30日（木）10：00～11：00

２. 場所：奈良中央公民館

３. 参加者：奈良教育大学教職大学院（Ｍ２）　井上岳海
社会科教育専修　４回生　山平楓
国語教育専修　３回生　吉岡優来
社会科教育専修　３回生　木幡美幸
書道教育専修　２回生　間宮千尋

４、活動内容の概要

奈良市立都跡中学校の生徒が、ならまちや奈良公園を巡る校外学習の事前の学習支援を行った。総合的な学習の時間で　事前に学んだ内容の復習クイズや、ならまちに住む人々が鹿と仲良くするためにしてきた工夫などについて講義を行った。また、校外学習後の事後学習で生徒が学習の成果を発表する場に参加した。

５、参加学生の学び・感想

都跡中学校のフィールドワークの講義と事後学習を通して、２つのことを学んだ。

１つ目は、フィールドワークを作っていくときの学校側の方針とのギャップである。今回の例で言えば、ほとんどをユネスコクラブの学生に丸投げになっていたため、ユネスコクラブのやり方で進めて行くはずであったが、学校としてやりたいことがあったため、そこのすり合わせが非常に大変だった。あらかじめ、学校側の意図を具体的に理解しておく必要があると感じた。

２つ目は、事後学習時の生徒の発表が、講義次第で大きく変わってくることを学んだ。やはり、目的意識をもって、フィールドワークに行くのと行かないのでは、事後学習の充実度が変わってくる。事前→フィールドワーク→事後のなかで一貫した目的や、問いがあれば、生徒は主体的に問いに対して、解決の糸口を探そうと努力できる生徒が育成できることを学んだ。

（教職大学院（Ｍ１）井上岳海）

生徒の考えをより深めていくことの大切さについて学んだ。机間指導や意見交流などで考えを聞くという一方向のやり取りではなく、「どうしてそう思ったのか」などのやりとりをすることで、意見の整理ができるだけでなく、新たな視点が得られるのではないかと考える。また、中学生という発達段階にあった言葉選びや発問の仕方の重要性についても学んだ。発問は、抽象的なものと具体的なものを使い分ける必要があると感じた。

（社会科教育専修４回生　山平楓）

今回の支援を通して、生徒の学習意欲を引き出しながら知らない土地について考えることができるようにすることの難しさを実感した。都跡中学校の生徒にとって、ならまちや奈良公園にいる鹿について身近なものではなく、校外学習に行く地域について愛着を持って魅力や問題を自分事化し

ながら考えることはできない。そのことを想定して、講義の中で歴史やクイズを入れながら、生徒自身が学んできたことと関連できるようにした。また、生徒自身で考える時間を増やしたり話し合いの機会を設けたりして工夫を行った。しかし、1時間だけでは伝えきることはできなかった。継続的に学習を行い、地域をよく知って校外学習を行うことで必要であると考えた。

（国語教育専修３回生　吉岡優来）

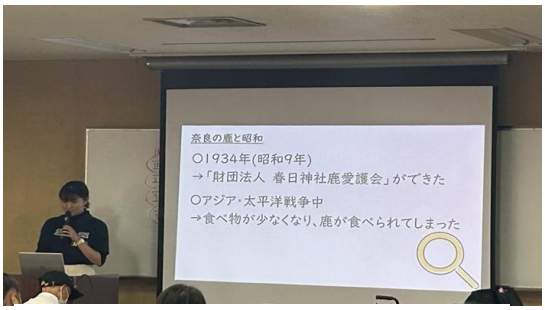
学んだことは２つある。１つ目は、わかりやすい資料を作ることだ。対象年齢を考え伝える情報を整理すること、図を使用し内容を視覚的にわかりやすくすることを授業資料作成過程で改めて学んだ。２つ目は、机間巡視についてだ。今回、机間巡視の際に、意見が出ていない班に他の班の視点をヒントで出すことや良い意見を褒めることを意識した。その結果、意見交流が進み始めた班や、全体で意見を交流する際に、恥ずかしそうにしかし自信に満ちた顔で発表する生徒を見ることができた。机間巡視の効果や褒めることの重要性について理解することができた。

（社会科教育専修３回生　木幡美幸）

今回の都跡中学校の講義と事後学習を通して、生徒への伝え方の大切さを学ぶことが出来た。プロジェクターに写しても見やすい大きさや色の配色になるように意識したり、指示は一言に対し伝えたい情報を少なくしたり、わかりやすい表現になるよう工夫した。また、広い会場に合わせて話すスピードもゆっくりすることを心がけた。

この講義はならまちをめぐる授業に思っていたよりも深くかかわっていた。次の機会に向け、ならまちやその歴史などへの理解をより深めることで、わかりやすく楽しく学べる授業づくりを大切にしていきたいと思った。　（書道教育専修２回生　間宮千尋）

講義の様子



講義の様子